

2023年10月22日（日）「新しい歌」

ヨハネの黙示録 5:6-10

6 また私は、玉座およびそれを囲む四つの生き物と、長老たちとの間に、小羊が屠られたような姿で立っているのを見た。小羊には七つの角と七つの目があった。この七つの目は、全地に遣わされている神の七つの霊である。7 小羊は進み出て、玉座におられる方の右の手から巻物を受け取った。8 巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老はおのおの、豎琴と、香で満たされた金の鉢とを手を持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖なる者たちの祈りである。9 そして、彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、屠られて、その血により、神のために、あらゆる部族と言葉の違う民、あらゆる民族と国民の中から人々を贖い、10 彼らを私たちの神に仕える御国の民、また祭司となさったからです。彼らは地上を支配するでしょう。」

#### 【序論】

そして、彼らは新しい歌を歌った。(5:9a)

今日の箇所は、後半で賛美の要素が出てきますので、特に賛美について考えてみるようチャレンジが与えられました。賛美は信仰者の人生における重要なテーマであると同時に、礼拝の中で多くの割合を占めているところでもありますから、避けて通ることはできません。私たちが毎週歌っている賛美は主の御前に真実なものであるだろうか。賛美というのは、音楽が好きだとか得意だとかいうところとは一線を画す領域にありますが、それでいて質が問われないわけでもありません。9節のことばを借りるならば、常に「新しさ」が求められているのです。これはもちろん伝統的で歴史ある賛美が悪いということではなく、真の賛美には如何なる時代のものにも「新しさ」が満ちているということです。では、その「新しさ」とはどこから来て、本質的に何を意味するのか。「天の礼拝」の光景からその答えを見つけることができるかもしれません。

#### 【本論】

##### 本論 1. 屠られた小羊

また私は、玉座およびそれを囲む四つの生き物と、長老たちとの間に、小羊が屠られたような姿で立っているのを見た。(5:6a)

天の礼拝の中心におられるのはキリストですが、ここでの呼び方は「屠られたような小羊」という微妙な表現です。なぜこのような言い方をするのか。前回主イエスについて語られた呼称は「ユダ族の獅子」(5:5)であり、百獣の王という「強さ」「勇ましき」を連想させるものです。ところが、ここでは抵抗することもなく屠り場に引かれて行った小羊と呼ばれ、

この表現はむしろ「弱さ」を連想させます。真逆とも言える二つの表現が並べられているのに驚かされます。主イエスのことを「獅子」と呼ぶのは5:5が最後であり、この後はもっぱら「小羊」と呼ばれ続けます。黙示録の中に「小羊」という表現は29回登場し、いずれも主イエスを表しています。ここには、十字架上で贖いの御業を全うし、罪と悪魔に打ち勝たれた主イエスのイメージがあるでしょう。それと同時に、ユダヤ教黙示文学においては、「小羊」は勝利の軍隊の長としてのイメージを持っているものもあり（Iエノク 90:9、ヨセフの証言 19:8）、このところにも主イエスの王としての性質が特別な意味で表されていると言えそうです。

それにしましても、「小羊が屠られたような姿で立っている」という周りくどい言い方は何を意味するのでしょうか。ここには、十字架の傷跡が手足に残る主イエスの姿があります。主はその傷によって勝利を得た（父なる神様への従順を貫き通した）のであり、その傷は永遠に讃えられるべきもので、栄光の輝きを放ち、罪人にとっては「贖いのしるし」にはほかなりません。主が死に打ち勝たれたことが、この傷を通して証しされているのです。

この栄光の主を取り囲むのが「**四つの生き物と、長老たち**」であり、天の礼拝はこれらの存在を中心に導かれていきます。

**小羊には七つの角と七つの目があった。この七つの目は、全地に遣わされている神の七つの霊である。** (5:6b)

小羊について更に詳しく説明されていきます。「**七つの角と七つの目**」を持つ小羊とは、想像すると何とも気味の悪い姿になってしまいますが、これは旧約聖書の関連箇所との比較によって理解する必要があるでしょう。ダニエル7章には「**獣**」が登場しますが、「**第四の獣**」には10本の角があります（ダニエル7:7,20）。この「角」は力と強さを表すものですが、小羊の「七つの角」は、七が完全性を表すことから、完全な力と王権を表すと思われます。

「七つの目」は全知であることを表し、キリストの目にはすべてが明らかであるということです。「**全地に遣わされている神の七つの霊**」とは、キリストの御霊が全世界を見渡し、潜在的な支配を確立しておられること。今の世は悪の勢力が猛威を奮っていますが、最終的には「小羊の王国」が完成することになります。

## 本論2. 巻物の授受

**小羊は進み出て、玉座におられる方の右の手から巻物を受け取った。** (5:7)

主イエスが父なる神様から巻物を受け取るとは何を意味するのでしょうか。これは神の権威が移譲されたこと、世界がこの先どのように進展していくのかを解き明かす権能が与えられたことを意味します。すべては主イエスを通して世界に開示される。

**巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老はおのおの、豎琴と、香で満たされた金の鉢とを手に持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖なる者たちの祈りである。**

(5:8)

主イエスに神の権威が移譲されたとき、この方への賛美が始まりました。今や「小羊」は「玉座におられる方」と同列に置かれています。この時の賛美には「豎琴」が用いられています。旧約時代にも弦楽器が賛美伴奏に用いられていたことが分かる記述があります。

琴をもって主に感謝せよ、十弦の豎琴をもって主をほめ歌え。(詩編 33:2)

楽器は賛美を導くのに有効な道具として用いられます。打楽器や管楽器が認められていないということではありません。

「香」はヘブル人の礼拝において一般的に使用されるものですが、私たちにはあまり馴染みがないかもしれません。「香」は、香料やその他の樹脂などで作られており、焚くと甘い香りが立ち込めました。この香りは聖徒の祈りを表し、「香で満たされた金の鉢」とは祈りの充満した器が大切に神の許に届けられたということでしょう。私たちは祈るとき、自分の祈りが「金の鉢」に入れられ、熱されて香となり、神が嗅ぎ取ってくださることをイメージするとよい。私たちの魂の祈りを主は聞き届けてくださるのです。だから、気持ちのこもっていない言葉の羅列にならないようにしたい。信仰と確信を持って祈るのです。

### 本論 3. 新しい賛美をもって

そして、彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、屠られて、その血により、神のために、あらゆる部族と言葉の違う民、あらゆる民族と国民の中から人々を贖い、彼らを私たちの神に仕える御国の民、また祭司となさったからです。彼らは地上を支配するでしょう。」(5:9-10)

四つの生き物と二十四人の長老が心を合わせて歌った賛美の内容がここに記録されています。この中で特に注目したいのは、「あなたは、屠られて、その血により、神のために、あらゆる部族と言葉の違う民、あらゆる民族と国民の中から人々を贖い、彼らを私たちの神に仕える御国の民、また祭司となさった」という内容です。その中心にあるのは信徒たちの救済、しかもその救いはイスラエル民族のみならず、あらゆる国々の民に及んだことが強調されています。人種、性別、言語、地域を問わず、主は救いをもたらしてくださった。主イエスの十字架の血潮、その福音のメッセージは、地の果てにまでも及びました。世界の各地に教会が立てられ、その地に福音の種が蒔かれていった。

賛美の新しさとは、福音のことばが持っている力から来るものです(クイズ3)。神が人を罪とあらゆる縄目から解放する御業は、常にどんな地域においても新しいのです。人間が形成する社会は、どの時代にも権力者によって統治され、弱い国は飲み込まれ、植民地的な支配原理が台頭していきます。共産主義の波は現在も多くの国の政治体系となり、かつてなかったほどの貧富の差が各地で生まれつつあります。しかし、どのような社会システムの下で生まれてきた人でも、イエス・キリストの福音と出会い、魂の解放を得ることができるのです。福音はその人の内に新しい生き方を挿し込み、新しいいのちがもたらす天国の原理をこの地上で実現させていきます。それは、誰にも命令されていないところで主体的に人に仕えていく道、誰も見ていないところで神に献身していく道です。自分の生き方を見ておられ

るのは神であり、その神がとてつもない祝福をこの人生にもたらしてくださるのです。そこで実るたくさんの果実は、人が社会にあって当然やるべきことから得られる報酬をはるかに上回る「神からの資産」「天国から来る資産」として、私たちの魂を豊かにしていきます。そのような生き方とは、人間の生来の性質から出るものではなく、主イエスが罪より贖ってくださることによって生まれてくる無償の献身の思いです。そのようないのちに生かされているところには、常に「新しさ」がある。それは、天に属する生き方であり、そこで歌われる賛美は絶えず新鮮な響きを持っています。そのような人生は、もはや何者にも縛られることのない解放を得ており、神との交流がその心の中心にあって、すべての社会を輝くものとしていきます。ですから、今どのような環境の下に生きていたとしても、希望を捨ててはいけません。福音の力は私たちを内面から造り変え、私たちを取り巻く社会をもラディカルに変革していくからです。

### 【結論】

私たちが礼拝で歌う賛美は、そういう意味で「新しい」ものでありたい。それは、古い賛美であろうと近代的な賛美であろうと、等しく持つことのできる「新しさ」です。福音に生きる喜びに満ち溢れるとき、賛美は新しいものとして私たちの魂から湧き出ます。そして、それを表現できるように練習することも重要です。その場限りのものが賛美なのではなく、準備された賛美もまた芳しい香りとなって主の許へ昇っていくのではないのでしょうか。

### 【祈り】

私たちの賛美に絶えず「新しさ」を加え給う、天の父なる神様。この「新しさ」は、主イエスの十字架の贖いという福音の新しさにほかなりません。その力に突き動かされるとき、私たちの内側から湧き出る歌となり、祈りとなって、香のようにあなたの許へ届けられます。私たちに真実な心を与え、それを芳しい香りとして受け取ってください。一人びとりの人生そのものが、福音の新しさに満ち溢れたものとなりますように。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
福音を信じる者の口に、絶えず「新しい歌」を授け給う、父なる神の愛、  
神の国を完成へと導き給う、「屠られた神の小羊」、主イエス・キリストの恵み、  
地上の祈りと賛美を、芳しい香として、神の許に昇らせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。